

「今、私の晴雨計は！」⑩

「スペシャルオリンピックス
新潟大会を終えて」^口

平山 征夫

思い切って立候補したら札幌も立候補してきた。冬季オリンピックを開催した都市との競争に一瞬ダメかと思ったが、幸い当方の「真の共生社会を目指して、遺産の残せる大会を！」という訴えが評価され新潟に決まった。

パラリンピックに比べればはるかに小さい大会ではあるが、全国大会ともなれば約1000人が県外から参加するし、必要ボランティア数も3000人規模となる。何より大変だと思われたのは大会費用の半分を開催地が集め

なくてはならないことだった。その目標額は巨大な壁のように見えた。そこで大会誘致に熱心な支援学校のK氏とT氏を県等に頼んで研修の名目で借り出し事務局長に据えるとともに、国体経験のある県庁OBにも手伝って貰うことにした。

不安のままのスタートだったが、輸送、財務、式典、ボランティアなど各実行委員会は、最初こそ頼りなさそうだったが次第に頼もしくなっていく。何よりもファミリーを中心とするメンバーは燃えていた。自分の子供のためにこの大会を成功させたいという想いが痛いほど伝わってきた。実行委員長の私も協賛企業集めなどに全力を傾注した。感動し

たのはふるさと納税に全国から多くの応援が集まったこと、それまで知らなかった身近な人から「実はうちにも障害者がいますて・・」と表に出て支援してくれる人がいたことだった。大会は大成りとなった。地元マスコミが異例の報道をしてくれたこともあって、大会が近づくにつれて浸透、期待以上に県民の関心は盛り上がった。開会式はアスリートの入場から一挙に雰囲気変わった。陶芸家・高井進氏労作の聖火台にドリムサポーターの安藤美姫さんたちとアスリートがリレーして点火、新潟のアスリート二人のたどたどしいけれど一生懸命の選手宣誓、そして新潟発のアイドル「ねぎっこ」の友情出演とプロ

グラムは最高潮へ盛り上がった。ミシアのアスリート全員へのチヨコプレゼントのサプライズまであって、開会式会場は温かい風に包まれた。支援学校の生徒の演奏で会場一杯の踊りの輪が広がった南魚沼市での閉会式と併せて大きな感動だった。

大会を終えた今分かったのは「知的障害者の貴方達には私達の支援が必要です。でも私達には貴方達の笑顔が必要なのです。優しさを忘れないために・・。」ということだ。それにしても私が小・中学校時代一緒に通った向かいの知的障害者の同級生T君はどうしているのだろうか？数年前から消息が不明だけれど・・。

（平成二十八年三月四日）